

岩井 清

Kiyoshi Iwai



「古時計」の新しい授業

キ  
リ  
ス  
ト  
教

# 『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

## 操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

## 読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF\\_is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

「古時計」の新しい授業

キ  
リ  
ス  
ト  
教

岩井清  
Kiyoshi Iwai

文芸社





## はじめに

この「古時計」は古希（七十歳）を迎えましたが、まだ動いています。古来はまれであったかもしれませんが、現在は普通であり、平凡です。日野原重明氏の提唱する「新老人の会」には、年齢不足で、入れてもらえません。

でも、やがては、「もう動かない」という時が来ます。すぐそこに迫っているかもしれない。今のうちにこの授業をすませておかなければと思って、筆を執りました。いえ、キーをたたきはじめてたのです。

こんな話を聞きました。学校での話です。生徒が先生に、「人はどこから来て、どこへ行くのですか。人は何のために生きるのですか」と質問しました。それに対する先生の答えは、こうだったそうです。

「おまえは、そんなめんどうくさいことを、いつも考えているから成績が悪いんだ。そんなひまがあるのなら、もっと勉強しろ」

この話を聞いたとき、義憤のようなものを感じました。こんなに大切な質問に、真正面から

真摯<sup>しんし</sup>に答えないうで、はぐらかしてしまう教育など、教育と呼べるでしょうか。人生の根本的な事柄を学ぼうとしない勉強など、勉強と言えるでしょうか。

青年時代から、聖書に親しんできた者として、今の中学生、高校生、若者に、いやすべての年齢層の読者に、そのような根本問題に対して、聖書はどう答えているかについて、少なくともご紹介ぐらいはできるかもしれないと思い、執筆を試みました。

最初に自伝的な話をしていますが、その中からも、その問題についての回答への示唆を汲み取っていただけばという願いを持っております。

次には、もっと直截<sup>ちよくせつ</sup>に聖書を紹介しました。さらに、これまでにしたためてきたエッセー、Q & A、メッセージなども載せようと思いました。

この小さな本が、少しでも今の世代の同胞にお役に立つとしたら、それに勝る喜びはほかにありません。

主の年二〇〇四年秋

著者より

「古時計」の新しい授業  
キリスト教

目次

はじめに ..... 3

第一章 「古時計」のたどった道

第一時限目 ● 白く塗った墓 ..... 10

第二時限目 ● ビザ……インドネシアと天国の ..... 22

第三時限目 ● アジアの友情 ..... 33

第四時限目 ● 失敗<sup>ミス</sup> ..... 44

第五時限目 ● 愛してる ..... 52

第二章 「古時計」の特別授業

第六時限目 ● 私はどこから来たのか ..... 68

第七時限目 ● 私はどこへ行くのか ..... 82

第八時限目 ● 私は何のために生きるのか ..... 92

第三章 「古時計」のエッセー

第九時限目 ● エッセーの朗読(1) ..... 108

第十時限目 ● エッセーの朗読(2) ..... 123

第四章 「古時計」へのQ & A

第十二時限目 ● 質問と回答(1) ..... 144

第十二時限目 ● 質問と回答(2) ..... 160

第五章 「古時計」のメッセージ

「不思議な招き・リフレッシュ」 ..... 176

「心のとびら」 ..... 188

「どう生きればいいのか」 ..... 201

おわりに ..... 214

注 ..... 216

参考文献 ..... 224

カバー・本文イラスト／根岸ハルナ

第一章 「古時計」のたどった道

## 第一時限目 白く塗った墓

脇町は「うだつ」の町と言われています。四国三郎と呼ばれている吉野川のほとりにある古い町です。特に南町には、うだつのあがった古い家並みが軒を連ねています。その端に教会があったのですが、当然そこにはうだつはあがっていませんでした。

かつては養蚕室であったといわれる教会堂は天井が低く、中学生の私が逆立ちすると、容易に足がそこに届くほどでした。

千葉県から徳島県の鳴島に引越した私たち一家は、まず阿波弁に往生しました。その地の子どもたちが父を取り巻いて、

「これかー」

と言うと、父はにこにここと、

「うん。そうだよ」

などと答えてしまいます。すると彼らは不審そうなしかも不満そうな顔をして「これかー」を繰り返すのです。

あとでわかったのですが、「これかー」とは、正確に書けば「これ、かー」であり、もうすこ



この防火壁が“うだつ”です（脇町・南町）

し丁寧な阿波弁では「これ、くれへんで」となるのです。つまり「これ、ください」というわけですね。

一事が万事、外国に行った思いで苦労しながら、私たちはだんだん徳島弁をマスターしていきましたが、ついにほんものにはなれませんでした。

鴨島の製糸工場に勤めながら、キリスト教会で伝道のお手伝いをしていた父は、問題があつてほとんど信者がいなくなつてしまつた脇町の教会に移転し、やはりその地の製糸工場に籍をおきながら、新しい思いで伝道の任についたところでした。

両眼の視力をほとんど失つていた母が父の伝道を助け、信州にいた長兄を別にして、男四人女ひとりの兄弟姉妹がそれに参画していました。

私たちの家には、必ずと言っていいほど、肉親以外のだれかが同居しており、多い時には五人も加わっていたため、いつも大家族でした。今考えても部屋割りをどうしていたのかが思い浮かびません。

土曜日は家庭の日と称し、車座になって茶菓にありついたり、少し調子は外れていましたが讚美歌を四部合唱したりしました。狭いながらも楽しい我が家のはずでした。

弟の学校で、国語の先生が生徒に団欒だんらんという言葉の意味を説明しようと試みたとき、「南町の教会に行つて、格子窓からのぞいて見い。あれが団欒じゃ」

と言つた由ですが、確かにそういう面もあつたことは事実です。

でも、あの当時、この心には何者が住み着いていたのでしょうか。鴨島時代からのことですが、近所の評判とは裏腹に、私は妹を無性に憎らしく思つたり、弟と取っ組み合いのけんかをして泣かせたり、水汲み、まき割りを命ぜられると、ふくれっ面でしか行なわないという毎日を送っていたのです。

すぐ中耳炎を患う体質だったので、水泳を禁じられていましたが、年下のいとこに、「言い付けたらこれだぞ」

と拳骨けんこつを丸めて見せ、近所の川に飛び込んで遊んでいました。ところが、

「清ちゃんがね、言い付けたらこれだぞだって」

と告げ口され、悔しがったこともありました。

教会の隣にびわの木があり、堀ごしに枝を伸ばし、なんとこちらの窓に入り込んで実を結んでいたのです。

当時教会には兄弟五人を含めて合計九人の子どもたちがいましたが、だれもその実を盗もうとはしませんでした。父は喜んで、

「さすがはクリスチャン・ホームだ。どうぞ召し上がってくださいと言わんばかりの実をだれも盗ろうとしない」

と幾分自慢げに話していたのですが、実は裏切り者がひとりいたのです。

私はその実には手をつけませんでしたが、堀に飛び付くと、いくらでも元の木からびわを失敬できたのです。食べ終わると、皮と種は堀ごしに隣家にお返ししていました。

教会の子だから、集会に出なければならなかったのですが、それはむしろ苦痛でした。できれば外で遊んでいたかったのですが、毎回そういうわけにはいきません。信者さんが増えてきて、熱心に讚美し、祈っているのですが、こちらの心は冷えるばかりでした。

おしのびで映画館に通ったこともあります。エノケンの演技に思わずゲラゲラ笑ってしまっ

たので、身元が割れて告げ口され、あとでひどく叱られました。これは、あとの話ですが、館内が暗いときには安心していても、中休みなどで電灯がつくと不安になることがありました。

（地震でもあって、あのシャンデリアが落ち、この映画館がつぶされたら、このおれはどこへ行くのかな）

などと要らぬことを考え、

（滅びしかないよな）

とおののいたものです。

姫路から末永弘海という牧師が来て特別集会が開かれたことがあります。あまり大きな声でなく、とつとつと話されましたが、力で迫ってくるのです。

その「敬虔けいけんを修業しゅぎょうせよ」というテーマの説教に心が揺さぶられました。人前は問題でなく、生ける神の御前みまへでの生活が問題であるという趣旨しゆいでした。<sup>\*1</sup>

聖書を読んでいてイエス・キリストの追い討ちを受けました。

「忌まわしいものだ。偽善ぎぜんの律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいのように、あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっぱい

す」。<sup>\* 2</sup>

心が槍で突き刺される思いでした。キリストに内面を言いあてられたと感じました。懊惱おうのうが始まったのです。もう今までの生活は送れなくなってしまいました。名前は清、真相は汚れ。どうすればよいのでしょうか。

（今までは外面ばかり飾ってきたが、これからは内面を清くしよう）

などと思ったのですが、うまく行くものでしょうか。

（びわのことも隣の小父さんにあやまらなくっちゃなあ）

（おやじにはどう言えばいいのだろう）

とにかくお詫びしようと決意はしたのですが、いざという段になって足がすくみました。

隣の小父さんは製糸会社の工場長であり、無口で威厳のある人でした。ひげも蓄えていたのです。

「信仰なんて弱い女子どもにはいいかもしれないが、大の男のものではない」

という信念をもっており、妻や子どもたちが教会に通うのは認めていましたが、自分は顔を見せようともしませんでした。

行きつ戻りつの躊躇ちゆうちよののち、ついに隣家を訪れ、小父さんに告白して、赦ゆるしを乞こいました。

なんと、「あの木はうちんじやないけん。工場のじゃけん」

と簡単に赦してくれたのです。

このこととは無関係ですが、この小父さんは、のちに病を得た際、目覚めて信仰をもったばかりでなく、その長女博子を私に嫁がせてくれました。わたしの義父になったのです。

さて、私が裏切った実父のほうですが、さすがに今度は面とむかって告白する勇氣が出ませんでした。父はもと軍人であり、いつもはユーモアたっぷりて人を笑わせてばかりいましたが、一旦叱るとなると私たちは震えあがったからなのです。

仕方がないので、毎日顔を合わせているにもかかわらず、手紙を書きました。一部始終を連れね、お詫びしたのです。どういうわけか、この手紙はなしのつぶてでした。父は何も答えてくれなかったのです。喜んでではなくていたのだらうとかってに思っています。

一九五二年の春、ラグビーで有名な脇町高校を卒業し、大学受験に失敗したので、京都の予備校に入りました。やはり教会に下宿させてもらい、隣家の産院や「ちよっと・まって」という珍しい名前を持つ進駐軍家族向けの八百屋さんでアルバイトをしながら勉強し、やっと次の年にパスすることができました。

(外側を飾るのではなく、内側の心を清くしよう)という決心については、結果は惨めでした。清くなるどころか、罪も汚れも深まっていき、一つの悪習慣にも勝てぬ始末でした。ほとんど

絶望しかかったとき、聖書から一条の光を見たのです。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子<sup>みこ</sup>を遣わ<sup>つか</sup>されました。ここに愛があるのです」<sup>\*3</sup>

小さいときから、「イエスさまは私たちの罪の身代わりとして十字架にかかって死んでくださった」と何度も言い聞かされてきたのですが、溺れる者がわらにもすがる思いで、新たにキリストの十字架にすがり、ようやく平安を得ることができました。

英国の作家ジョン・バニヤンは『天路歷程』の中でこう書いています。

「クリスチャンが十字架の前までのぼってきたその瞬間、いままでしょってきた重荷が肩からすべり落ち、ころころころがって、墓穴に落ちこみ、まったく見えなくなってしまうた。……それから、しばらくのあいだ、彼はじっと立っていた。十字架を見上げただけで、背中の重荷がとれてしまうとは……そう思うと、畏怖<sup>いふ</sup>の念にうたれざるをえなかったからである」<sup>\*4</sup>

このくだりを読むといつも感動するのは、自分の経験と呼応するところがあるからであろうと思っています。

学生時代、同じ大学に入ったすぐ下の弟とともに、三重県に住むフローレンス・ミラーという宣教師のお手伝いに行ったことがあります。控えめでありながら伝道に熱心なその生活に感

銘を受けて帰ってきました。彼女は私たちにキリスト者学生会を紹介し、日光で行なわれたその夏期キャンプに招待してくれたのです。そこに行ってみて驚きました。

学生と言えば左翼、唯物主義ゆいぶつしゆぎ、無神論とほぼ相場が決まっていたその時代に、天と地を造られた神を信じるクリスチャンがこんなにかという喜ばしい驚きです。一週間足らずのそのキャンプはあつという間に終わってしまいました。聖書を毎日読む習慣が身につく、生涯の師と仰ぐ教師たちや以後長期間にわたって親しい交わりを続けていく友人たちとの出会いにも恵まれたのです。

四回生となったので、卒業後の進路を決めなければなりません。以前から、大学に残って勉強を続けたい思いと、高校の英語教師になりたい思いとの間で揺れていたのですが、そこに伝道師、牧師になりたい思いがもう一枚加わってしまいました。宣教師せんこうしの崇高な生活に感銘を受けたこと、学生キャンプで深く聖書を学んでいる諸教師に親しく接したことがその原因でした。しかし、大学の教官や高校の教師なら、貧しいながらも生活が安定するでしょうが、牧師などになるものなら、その辺が、すこぶる不安定になってしまうと考えたのです。そのころはもう隣家の博士と婚約同然でしたが、彼女との結婚もあきらめなければならぬであろうと思ひ込んでしまいました。

悩んだ末、思わずため息が出ました。そばにいた父が、

「ほう。清がため息をついている」

と言いました。その言葉で目が覚めたのです。

(そうだ。悩んでばかりいないで、祈ってみよう)

祈ろうとして、机の前に座ったときには、もう答えが与えられました。聖書の言葉がはつきりと心に浮かんできたのです。

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい」

\*5

(これが神の答えだ。もう献身の道、伝道師、牧師の道しかない。これで決まりだ)

こうして大学卒業後、ただちに神学校に入ろうと決心しました。

自分で決めたつもりでしたが、じつは背後の祈りに押し出されたに過ぎなかったことがあとでわかりました。

もともと父恭三は、小さい時から「理屈の恭ちゃん」と呼ばれるほど、物事を突き詰めて考えなければ気が済まないたちでした。陸軍の幼年学校、士官学校と進み、将校になった後でさえ、不当と思われる上官に「絶対不服従」を誓ったという一徹さも合わせていたのです。その一方で、恋愛至上主義を唱え、宝塚などに入り浸っていたというから、相当混乱していた

のではないでしようか。両親の感化もあつて、教会には通いながらも、人生そのものは投げてしまつていたようです。

(こんなつまらない人生を子どもも味わうのか。だったら、子どもは作らない)

と心に決めていたようでした。

その父が、ふとしたことから東京の落合にあつた<sup>キリスト</sup>基督伝道館に通うようになり、柘植不知人という力ある伝道者の説教を通してキリストの愛に触れ、文字通り百八十度の回心を経験しました。その時のことを彼はこう表現しています。

「信仰生涯を航海にたとえば、片帆を上げて自ら思つた所に行くにあらずして、真帆を上げて恵みの風のままに前進すること、この真理を教えられ、一切を船長なる主に委ねて出帆す」

(この愛を伝えるには、自分だけでは足りない。子どもが六人ほしい)

と思うように変えられてしまいました。

「そんな。六人なんてよう生みません。奥さんを取り替えてください」

病身の母はクレームをつけました。

「おまえに頼んでおりやせん。神さまにお頼みしているんだ」

と父は答え、なんと本当に子どもが六人与えられたのです。それで、いちばん下の弟には、満という名前がつけられました。今、四人が牧師となり、一人は牧師夫人です。唯一社会人と

なった弟も牧師に勝るとも劣らないユニークな方法で伝道に励んでいます。

さて、婚約者を失うのではないかという思いわずら煩いも、単なる危惧に終わりました。「神学校に行くように導かれたので、婚約は白紙にしてください」と書き送った手紙は、かえって彼女を悲しませただけだったのです。その後なお五年も待たなければなりませんでしたが、私たちは、協町キリスト教会で結婚式をあげることができました。

神学校は塾形式の小規模な学び舎でしたが、ここにきて初めて勉強の楽しさを知ったように思います。良い友にも恵まれました。三年生のとき、八カ月ほどオーストラリアに視察兼留学に行くというチャンスに恵まれたので、結局四年かかって卒業しました。

その後、最初は聖書を毎日読む運動を推進する「聖書同盟」の主事に就任しましたが、父が協町と神奈川県の平塚の教会を兼務するようになったことから、父の手伝いが必要となり、夫婦で三鷹から平塚に転居してきました。こうして平塚での生活が始まったのです。



## 第二時限目　ビザ……インドネシアと天国の

弟の満はイギリスの神学校を卒業してから、宣教師としてインドネシアで働いていたのですが、かねてからの婚約者と現地で結婚式を挙げることになりました。本来ならば、父が家族の代表として出席しなければならぬはずでしたが、そのころは病床に伏す身となっていました。

牧師が二つの教会の責任を同時に担うことを兼牧と言うのですが、父は七年にも及ぶ四国と神奈川の兼牧の結果、疲労が重なり、糖尿病からはじまって、ついに胃がんを患うまでに至ってしまっただけです。

「先生の休み場所は列車の中だけでもんなあ」  
教会の長老さんが述懐していました。

新幹線もまだ開通しておらず、飛行機などは特権階級の乗り物でした。父と母はほとんどまる一日かけて、鈍行か急行の列車と連絡船とを乗り継ぎ、毎月遠路を往復していたわけなので、す。

脇町の父を見舞いに訪れたときのことでした。

「清。郵便局に行つて、これを全部下ろしてきてくれ」

と言われました。

見ると、その通帳は、父が聖地（イスラエル）旅行にと貯めておいた、なけなしの貯金では  
ありませんか。

「この金で、家族代表としてインドネシアに行ってきたくれ」

いいのかなあと思いつつも、言われたとおりにしました。

あとは平塚に帰り、早速パスポートとビザの準備をしなければなりません。

旅券がもらえたので、インドネシア大使館に行き、ビザの申請書を提出しました。

職業欄には牧師と書きました。

「牧師はだめなんですよ」

受け付けの女性が気の毒そうに言うのです。

「弟の結婚式なんです。お願いします」

気の良さそうなそのインドネシア人は、上司に掛け合うためか、しばらく奥に消えました。

そして戻ってくると、

「やはり、だめでした」

一九七〇年代のインドネシア（イスラム政権で政情不安定）のことであり、キリスト教の牧  
師の入国は不可能に近かったのです。

(どうしたらいいのだろう)

多くの人から、お祝いの金品を預かり、お土産も買い込んでいたのです。しばらくは途方に暮れて身動きができませんでした。

いつまでもここにいるわけにいかないしと思ひ直して出て行きかけたとき、気の毒そうに見守っていたその女性が、

「香港に行って申請してごらんなさい」

と言ってくれたではありませんか。

帰途についたのですが、頭の中には、いろいろな思いが駆けめぐっていました。

(香港でビザをもらって、すぐジャカルタに飛んでも、結婚式には間に合わない)

(シンガポールからならぎりぎり間に合うかもしれない)

(香港でもらえる可能性があるとすれば、シンガポールでももらえるのではないか)

胸は早鐘のように高鳴っていました。

(父の代理なんだから、とにかく相談してみよう)

四国に電話をかけました。テレフォンカードもない時代です。百円玉もいれられません。十円銅貨をたくさん用意して父と話しました。矢継ぎ早に、十円玉が穴の中に落ちていきます。

父は事情を聞いてしばらく沈黙していましたが、

「祈りつつシンガポールにいきなさい」

と助言してくれました。

シンガポール行き飛行機を予約して、空港に急ぎました。式の前日のことです。

機内では気もそぞろで、どうしても落ち着きません。

(シンガポールでもビザをもらえなかったらどうしよう)

(行つてからだれに声をかけて頼もうか)

機内食を楽しむこともできませんでした。ふと療養中の父を思い起こしました。

(そうだ。思い煩いつつでなく、祈りつつシンガポールに行けと言われたんじゃないか)

坐り直して祈りました。ようやく気持ちも落ち着き、到着を待つことができました。

その夜はホテルから現地の知人に連絡を入れ、協力を依頼しました。みな快く聞き入れ、親身になっていろいろ手を回してくれたのです。

いよいよ当日です。なるべく早い時間にとまって大使館に急ぎました。しかし、すでに先客というか、先に申請を済ませた人々が何人も待っているではありませんか。そればかりか、係官の動作がすこぶる緩慢なのです。まるで静かな踊りでもあるかのように、こちらの机からあちらの机へと行き来するのです。

(日本ならもつとてきぱきやるのになあ)

やきもきしながら順番を待ちました。まだ、自分のパスポートは積み重ねられた山のふもと  
のほうでうめいています。

やっと自分の番がきました。緊張して、結果やいかにと固唾かたずを呑んだのですが、拍子抜けす  
るほどいとも簡単に大きなゴム判を押ししてくれたではありませんか。

パスポートをひったくるように受け取り、タクシーで空港に直行しました。都合よくジャカ  
ルタ行きの便に間に合うことができ、息をついたので。

ジャカルタにはすぐ到着しました。当時はお世辞にもきれいとは言えない空港でした。ポー  
ターに荷物を運んでくれと頼むと、彼はためらいも見せないで、待機していたタクシーの所に  
行き、トランクを開けて荷物を全部積み込んでくれました。

式場の住所をメモしておいたので、それを運転手に見せ、車は発進しました。初めての土地  
なので、そこまでの位の時間で着くのかさえ分かりません。タイム・リミットは迫っていま  
す。気がせいっていたのに、なんと車は途中でストップしてしまい、あまり人相の良くない男と  
子どもが乗り込んできて、私を取り囲む形になりました。悪い予感は当たりました。

「これから行くところは遠距離なので、これだけは払ってほしい」

隣に坐った男が英語で切り出したのです。正確な金額は忘れてしまいましたが、不当な値段  
であることだけはすぐに分かりました。

(やられた。ポーターとぐるだった)

みごと鴨にされてしまったのです。心臓はもう一度早鐘のように動悸しています。そのとき、とっさに二つのことが心に浮かびました。一つは大戦中に日本軍がこの国に行なった残虐、蛮行の数々、もう一つは聖書の言葉でした。

「すべて求める者には与えなさい。奪い取る者からは取り戻してはいけません」

\* 6

(なんかくやししいけど払ってやろうと心を決め、

「私はクリスチャンで牧師だ。今後こんなことはやめなさい」

と言いながら、その金額を支払ってやりました。すると、

「おれはムスリムだ」

男は言い返し、紙幣を握って子どもと一緒に降りていったのです。

やっと弟の待つ家に到着しました。式場に向かう三十分前のことです。

聞いてみると払ったタクシー代は通常の約十倍でした。

「でも払って良かったよ。この間も抵抗した日本人が刺されたもの」

これが弟のコメントでした。ぎりぎりでしたが、彼は私の安着を喜んでくれたのです。

結婚式も無事にすんで数日たってから、私たちは弟の車でジャカルタ市内をドライブしてい

ました。

「あつ、あいつだ」

なんと目の前を、あの運転手のタクシーが走っているではありませんか。人口何百万かのジヤカルタで、彼を見つけてしまったのです。

追跡してそのタクシーを止め、弟はインドネシア語で何か抗議していました。その内容は何も分かりませんが、神は生きておられるという厳かな思いに打たれました。

途中、タイで働いている日本人宣教師を訪問し、羽田ではなく大阪空港に帰り着きました。父が近江サナトリウムに入院すると聞いていたので、見舞いがてら報告に行こうと思ったからです。空港から家に入話を入れました。妻の博子が出たので、

「今大阪に着いた。お父さん、予定どおり入院したので」

と聞くと、泣いているような叱っているような答えが返ってきました。

「何言ってるの。お父さんはもう天国よ」

絶句してしまいました。落ち着いて聞いてみると、父は吐血が収まらず、弟の結婚式の翌日近江サナトリウムに入院し、まもなく手術を受けたのですが、もう手の施しようがなく、そのまま天に召され（一九七〇年二月十日午前九時）、十一日の今夜、協町で前夜式が行なわれると

のことでした。安心して空港ロビーの片隅に行き、新聞で顔を隠して嗚咽おえつしました。

すぐ四国に飛ばなければなりません。インドネシアから帰ったばかりで、真冬に夏服というみじめな姿でしたが、そのまま徳島空港に直行しました。

入院のため脇町を出発する前に、父がこう祈っていたことを後で知らされたのです。

「清はシンガポールまでのビザで出ましたが、紅海の水を涸からして道を開きたまいし主よ。シンガポールとジャカルタとの間にも、同じように道を開いてくださることを信じます」

この祈りは応えられて、道は開けたのです。

初めて遺族の立場で葬儀に出席しました。父を愛し、最後まで祈りつづけられた方々が遠くから、また近くから大勢かけつけてくださったのを見て、どんなに慰められ励まされたかわかりませんでした。

この時の葬儀も厳かな中に執り行われ、天の祝福を受けたのですが、実は、生前父は「岩井恭三凱旋がいせん記念式執行順序」と銘打めいって、自分自身の告別式順序を作成していたのです。その遺品が発見されたのは葬儀が終わってからのことでした。敗戦後上海に待機していた父が、鉄道連隊長として処刑される可能性もあった中でしたためたものようでした。

凱旋式とは天国への凱旋を意味していました。そこには「弔辞・弔電または祝辞・祝電」と

# 途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。  
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

## 著者プロフィール

### 岩井 清 (いわい きよし)

- 1933年、東京に生まれる。少年時代を主として船橋（千葉県）で過ごす
- 1952年、脇町高校（徳島県）卒業後一浪
- 1957年、京都大学教育学部卒業
- 1961年、東京神学塾を経て聖書神学舎卒業（その間1959年から1960年にかけて、聖書同盟視察のため、8ヵ月間オーストラリアに滞在）
- 1961年、聖書同盟主事に就任
- 1962年、(田中)博子と結婚、(三男二女を授かる)。平塚福音キリスト教会副牧師を兼務
- 1970年、平塚福音キリスト教会の牧師に就任
- 1983年、同教会内に活水聖書学院が設立され、教務主任を兼務
- 1986年、同学院の学院長に就任
- 1994年、「燃え尽き症候群」らしきものを感じ、カナダのリージェント・カレッジに留学
- 2004年、平塚福音キリスト教会に就任して42年目を迎える

## 「古時計」の新しい授業 キリスト教

---

2005年2月15日 電子出版発行

著者 岩井 清

発行者 瓜谷 綱延

発行所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Kiyoshi Iwai 2005 Corded in Japan

ISBN4-8355-8221-7 C0095

(文芸社発行の通常書籍（紙の本）については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」サイト、<http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。)

新 05.02.02 Y.H.